ホームページを利用したドイツ語教育の実践

吉　田　光　演
広島大学総合科学部

0．はじめに*

本論では，ホームページを利用した外国語教育のコンセプトとそのメリットを考察し，筆者の経験に基づいて，ドイツ語教育の現場でホームページをどのように活用できるかについて報告する。周知のように，ホームページとは，世界的な規模で張り巡らされたネットワークであるインターネット上で，WWW(＝World Wide Web)というしくみに従って公開された文書のことであり，E-mail と並んでインターネットの代名詞となっている（“WWW” とも “Web” とも呼ばれるが，ここではよく知られた「ホームページ」という用語を使う)。

日本の大学における外国語教育は，教育目標，カリキュラム，教育内容，メディア，教授法，評価法，設備など，どれをとっても問題を抱え，これらをいかに改革するかという問題に直面している。「ホームページを使った外国語教育」というと，コンピュータを駆使した “CALL” (Computer Assisted Language Learning：コンピュータ支援外国語学習）の一環として受けとられ，コンピュータを使わない通常の外国語授業とは関係がなさそうに見えるが，そうではない。大勢の教員がワープロソフトで論文を作り，インターネットを通じて情報を収集発信し，大学生の多くもレポートの資料収集や就職活動でインターネットを利用する時代である[1)]。コンピュータとインターネットは今や知的生活に不可欠のツールになった（正確に言えば，コンピュータはインターネットを利用するための道具で，インターネットは情報を収集発信するための道具といえる)。しかも，世界中に巡らされたネットワークには英語やドイツ語，フランス語などの外国語が氾濫している。この世界と真正面に向き合い，そこに積極参加するには外国語の力が必要である。筆者の問題意識は，「こんな便利なツールを外国語教育の場で使わない手はない」という素朴な発想にすぎない。しかし，実際に授業で使ってみるとインパクトは非常に大きい。そこから得た見通しは，インターネットは，21世紀の外国語教育のあるべき方向を示す（一つの）跳躍台となる可能性をもっており，外国語教育のコンセプト・教育目標とも密接に関連するということである。以下では，これを理念と現実に照らし合わせながら明らかにしたい。

1．ドイツ語教育とインターネット

インターネットを利用すれば，日本にいながらにしてドイツ語圏の新聞，テレビ・ラジオのニュースがリアルタイムで受信できる。ドイツ各地の観光情報・飛行機・鉄道の時刻表，ホテルの情報もホームページで簡単に調べられる。ドイツの大学のカリキュラム・教員の研究内容なども各大学のホームページに載っているから，ドイツ留学の情報もすぐ入手できる。数年前までは考えられなかったほど，ドイツ語圏に関する情報が身近になったのだ。ドイツ企業の製品，文学・絵画・音楽・スポーツなどについての情報や個人のホームページの数も膨大である（一説には，世界中のホームページが使用しているさまざまの言語の中で，英語に次いで多い言語がドイツ語と言われている)。これまでなら「ランデスクンデ（ドイツ事情・文化)」を扱おうとすれば，新聞・雑

・書物・ビデオを高い値段で取り寄せなければいけなかった。ホームページにはそれらをカバーする(あるいは凌駕する)アクチュアルな素材があふれており，これによってドイツ語圏の人々の生活・文化を直観的にイメージできるようになった。つまり，ホームページは我々を遠い世界に一足飛びにつなげる「どこでもドア」なのだ。

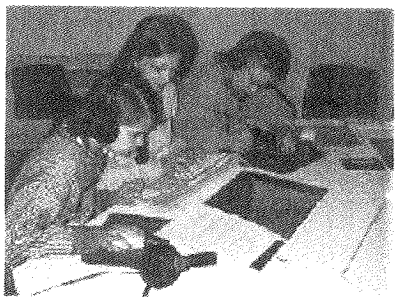
「日本ではドイツへの関心が薄れている」という意見も聞くが，ホームページの検索エンジンである "Yahoo Japan"(http://www.yahoo.co.jp)で「ドイツ」の項目を検索すると，477件もヒットする[2)]。より検索能力の高い "Infoseek"(http://www.infoseek.co.jp)では 40,031件のヒット数で，驚異的数字である。内容は留学案内，旅行記，観光案内，輸入情報，料理，音楽・芸術・生活など多岐にわたる。コミュニケーションの新しい手段であるインターネットでは，ドイツに関する関心は低くない。むしろドイツ語教員のホームページが数えるほどしかないのが不思議である。筆者は自分のホームページを "Yahoo Japan" に登録しているが，学外の未知の人々から時々インターネット経由で質問を受ける。例えば，台湾の学生から筆者の論文に関する質問を受けたり，ドイツ人から広島に関する質問を受けたりする。遠く離れた茨城県の小学校の生徒から「卒業制作で世界の国の言葉を調べて飾りたいのですが，ドイツ語で『こんにちは』，『がんばって』はどう言うのですか」といったメールをもらうのは楽しい。ネットワーク社会ならではの出会いと発見の喜びである。インターネットは，情報がただ豊富にあるという客体的存在ではなく，自ら参加して情報リソースを作り上げていく主体的なコミュニケーションの場なのである。

ドイツでもインターネット利用に関する議論が進んでいる。筆者は，文部省の「平成11年度ドイツ語教育担当教員ドイツ派遣」プログラムで，1999年8月1日から21日までの3週間，フランクフルトのゲーテ・インスティトゥート(Goethe Institut: GI と略す)のドイツ語教員研修ゼミナールに参加する機会を得た。テーマは『マルチメディア』で，日本，中国，インド，カナダ，ブラジル，スペイン，フランスなどから19名のドイツ語教員が参加し，ドイツ語 CD-ROM 教材の実習評価，CD-ROM 作成プロジェクトや教授法の議論などの活発な活動などを行った。こうしたゼミを GI が行うこと自体が最近のことであり，ドイツでもマルチメディア教育への関心が高まっていることを物語っている。GI 本部のホームページ(http://www.goethe.de)にはドイツ語学習に関する多くの情報が掲載されている。ただし，ドイツや世界各地の GI には，Mediothek やサイバーカフェの形でコンピュータが設置されているが，授業でコンピュータが使われることは少ない。ネーティヴスピーカー教員による運用能力の向上が眼目なので，コンピュータはもっぱら自習用の補助手段として位置づけられている。ドイツでは，大学でもインフラとしてのハードウェアの導入は日本ほど大規模には行われていない。図書館にはコンピュータ端末があり，情報検索ができるようになっているが，LL やコンピュータ教室などのハコ物の数は日本の比ではない。

さて，このゼミで「ギムナジウム Gütersloh 校のマルチメディア実践」という講演がU. Engelen 氏によって行われた。Engelen 氏は "Evangelisch Stiftliliches Gymnasium Gütersloh" 校の校長で，この学校はドイツのギムナジウムでのニューメディア教育のモデルになっている。小さな町のギューテルスローで大規模な教育プロジェクトが実施されている理由は，この町に(辞書などでも知られる)出版社ベルテルスマン社があり，この出版社が同校のメディア教育を財政的に支援しているからである。書物を通じた知識の獲得とコンピュータを通じた知識の獲得の間に連続性を見いだそうとする試みの現れといえる。実際，このギムナジウムでのメディア教育の特色は，古いメディアとコンピュータを中心とするニューメディア双方の長所を把握させることに力を注いでいる点である (http://www.ev-stift-gymn.guetersloh.de/)。

以下，簡単に同校のメディア教育の特徴を挙げる：

Gütersloh 校のコンピュータルーム



・図書館が充実していて，メディアルームと調和している。
・演劇ができる広いスタジオ設備とビデオ録画設備がある。
・書物・映画・ビデオ・コンピュータ・インターネットなどのさまざまのメディアの特徴を意識させる教育を行う。
・メディア教育を受けてからではないと，コンピュータもインターネットも利用できない。
・コンピュータルームの机は五角形で，モニタを机の内部に埋め込んで，コンピュータを意識させずに，討論しながらコンピュータを利用できるようになっている。
・一部の情報教育の専門家だけではなく，どの科目の教員もメディア教育を行う。
・生徒にノートパソコンを購入させて，メディア学習を行うラップトッププロジェクトの実施。

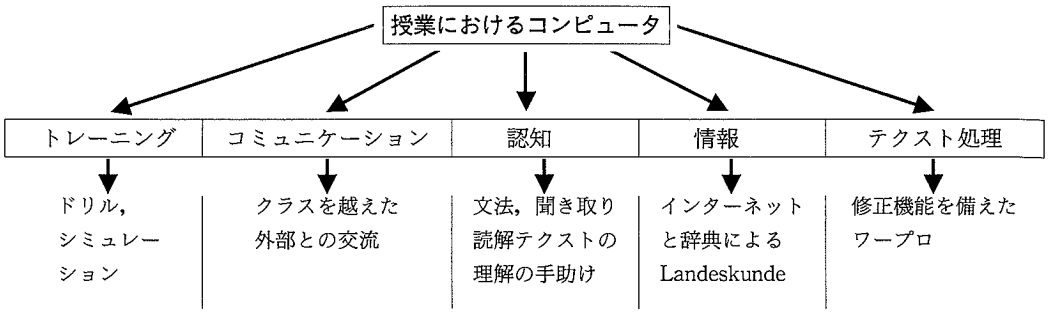
中でも圧巻なのは，授業で生徒たちが得た成果を公開したホームページである。「形として作ってみた」程度の日本の学生たちのページとは違って，イギリス旅行で得た体験記録，天文学のページ，音楽の理論など中身が濃いもので，生徒たちの共同作業の足跡が分かる形になっている。筆者が強調したいのは，メディアに対する明確な教育理念である。ここでは個人のページは一切ない。生徒たちが休み時間に自由にホームページを見る自由もない。大学生に対して，同じ論理をかざすわけにはいかないが，インターネットが内包している無秩序に対する警戒の念・モラルが働いている。コンピュータやインターネットで何をどのように表現するのかという教育的な観点がなければ新しいハードウェアは無意味である。「コンピュータが何百台あるから，うちの大学の情報化は進んでいる」などといった子供だましの論理が長く通用するはずがない。メディアは万能ではなく，学習者の創造的な自己表現を可能にする限りにおいて価値をもつのだ。

その他にも筆者は，マインツのギムナジウム(Gymnasium am Kurfürstlichen Schloss)でコンピュータを利用した英語授業を見学した。20名ほどの生徒たちが，CD-ROM 百科事典とホームページを検索しながら，「ジェンダーの役割の変化」について調べていくという内容で，教科書で学習した項目を実際に検証・対比させることが狙いであった。説明は基本的に英語で行われ，生徒たちは2～3名のグループで議論しながら，ホームページの内容を調べていった。技術的に新しい内容ではなかったが，教科書の学習とコンピュータ学習を連動させる工夫がなされていた。

ドイツにおけるホームページの利用は総じて，学習を補完する補助的位置づけであり，表現メディアとしての役割であり，「全面利用か拒否か」の二者択一の態度ではない。それでよいのである。筆者は，ある大学の方から「ドイツ語の授業を全てコンピュータで行うにはどんな方法があるか」という質問を受けて当惑した。コンピュータでできることとできないことの区別をつけるのは当然だと思っていたからである。CALL 授業は，コースウェアの形で全体をコンピュータ学習にあてるものと理解されているのかもしれないが，教師と学生，学生と学生の間の創造的な共同の活動総体の中に，コンピュータを適切に位置づけることが重要であると思われる。

2．授業におけるインターネットの位置づけ

Funk (1999) は外国語授業におけるコンピュータの役割を以下のように図示している。



ホームページを利用した外国語学習は上の図のどのアスペクトも関係するが，ここでは特にコミュニケーションと情報，テクスト処理にしぼって論を進める。今日のツールとしてのコンピュータとインターネットの加速度的な普及を考えると，インターネットを利用した外国語教育は，「コンピュータ支援」というような特殊なハードに依存した名称ではなく，むしろ「メディア主体の外国語学習」(＝Media-Oriented Language Learning)とでも呼ぶべき多様な利用方法が可能になっている。その特徴は次のようにまとめられる：

(1) ハードやソフトに関する技術的な知識は最小限でよい。
(2) コンピュータ教室・CALL 教室などの大型設備に頼る必要はない。
(3) 通常教室での授業やさまざまの教授法と両立しうる方法である。
(4) ドイツ語圏の文化・社会に関する具体的・アクチュアルな関心を呼び起こす。
(5) プロジェクト型・発信型の創造的なドイツ語学習を可能にする。
(6) 大学という制度的枠組みを超えたコミュニケーションと結びついている。
(7) 限られた授業の枠組みにとらわれない自律学習(Autonomes Lernen)が可能になる。

(1)については研究室や自宅で“Netscape”や“Internet Explorer”などのブラウザーを用いてホームページを操作する程度の技術(マウスクリックと簡単なワープロ技術)があれば十分ということである。インターネット利用の大きな長所は，Windows 系，Macintosh，Unix 系など異なったコンピュータの OS に左右されずに活用できることである(細かな点では，ブラウザーの違いで利用できる機能が若干異なってくるが，基本的なしくみは同じである)。

(2),(3)については，CALL 教室を利用できれば理想的であるが，そうでなくてもホームページを利用する方法は十分可能である。インターネットに LAN 接続したコンピュータ端末室や自習室があれば，教室外活動・自習・宿題の形でインターネットを利用できる。又，最近では自宅でインターネットを活用する学生も増えてきている。筆者の授業では約 3 ～ 5 割（1 セメスターで 5 ～ 7 回程度）の割合で CALL 教室を使用し，それ以外は普通の LL 教室を使っているが，CALL 教室を使う場合でもコンピュータ自体を操作する時間は全体の半分以下（45分以内）である。以下で述べる方法は，CALL 教室がそもそもない，あるいは利用できない場合でも問題なく実施できる。ホームページを予めプリントアウトして配布してもよいし，印刷したものを OHP や接写カメラで見せるのもよい。あるいは授業中に，ホームページの URL（“http://”で始まるホームペー

ジのアドレス)を教えれば，学生は放課後に自分でそのページを見てくるだろう。

3．インターネットによる知識社会の実現　－ ドイツとの出会い

「知識社会(＝Wissensgesellschaft)」とは Rüschoff & Wolff (1999) の用語である。「情報社会」という概念の方が広く通用しているが，情報社会というと情報が客観的に存在し，それを受信することが重要だといった受動的態度を連想させやすい。しかし，知識は暗記すべき絶対の知識ではなく，個々人が自分の心の中に構築(konstruieren)する積極的行為として理解すべきである。日本を含めて今日の世界は，インターネットなどのネットワークを媒体として「今日の社会に流通する知識全体がいつでも社会の全ての成員がアクセスできる」知識社会へと転換しつつある(Rüschoff & Wolff 1999, p. 16)。日々更新されていく膨大な情報を「宣言的な知識」(deklaratives Wissen, 同上)としてそのまま記憶することは複雑すぎて不可能である。大切なのは，いかにして個々人に関与する情報にアクセスし，それらを選り分けていくかという「手続き的な知識」(prozedurales Wissen, 同上)である。書物による知識の獲得の価値が下落したわけではない。むしろ，印刷媒体とデジタル・メディアとの相互参照が可能になったという意味で，知識の主体的獲得が問われる時代になったのである。ドイツ語教育の現場に還元すれば，これまでは，知識を全面的にもった教師が特定の教科書を選択して，知識のない学生に対して一方的にドイツ語の知識を伝達してきた。この延長線上で「異文化間の交渉能力」を説いても，それはお仕着せのテクニックの伝授でしかない[3)]。それに対して，世界中のネットワークにつながったメディアは，「学ぶ」というスタイルを根本的に変える認知的な側面を内包している。三宅(1997)は，これを次のような内容で分かりやすく説明している：

> 「これから先いつまでも，ある短い時間に教えてもらったことを，あるほんとうにごく短いテスト時間という時間の中で思い出せるかどうかで子どもの価値づけをするという習慣が続いていくとは思えません。情報はどこかにあるのです。情報を探すこと，情報が探し出せることのほうが大事になる世の中がもうすぐ来ます。情報はどこかにあるのだから，とにかく頭の中に詰め込んで覚えておくことは大切ではなくなるでしょう。」(三宅 1997, p. 50)

むろんドイツ語の文法・運用能力のトレーニング自体は教師が教え，学生が行う他はない。しかし，それは自己目的ではなく手段であり，本当の目的は，学習者が必要とする知識の獲得であり，外国語を通した自己表現であり，学習者が将来出会う異文化の人々との交流である。教師の役割は，必要となる情報リソースへのアクセスの仕方を教え，学習者の目的意識を目に見える形で呼びおこしてやることである。このことは具体的には次のようにまとめられる：

(8) 学習者はホームページの世界を通してドイツの異文化を具体的に体験できる。
(9) 学習者は自分自身の関心に応じてさまざまのホームページを選択できる。
(10) 教師は到達すべき目標を決定するのではなく，ナビゲートする役割を担う。

ベルリン，ハンブルグ，ブレーメン，ケルン，フランクフルト，ミュンヘンなどの大都市や，ハイデルベルク，ローテンブルク，フュッセンなどの観光地などほとんどの町には公式・非公式のホームページがあり，http://www.berlin.de, http://www.hamburg.de のような分かりやすい

URL 名で参照できる。ホームページ上ではテキストだけでなく，絵・写真などの画像，アニメ・ビデオなどの動画，音声・音楽といった視覚的・聴覚的なメディアも含まれるので，内容を直観的に理解することができる。又，JavaScript, Java などのスクリプト(補助プログラム)を利用して動的でインタラクティヴな応答を返すホームページもあり，応答の仕方が臨機応変に変わる。インターネット上の膨大なホームページはいわゆる「ハイパーテキスト」として相互に網の目のようにリンクしあい，検索エンジンによって検索語をタイプすれば自在にジャンプできる。多くのページでは「リンク集」が作られており，そこから別のページに移動できる。従って「ドイツ料理」,「ドイツのビール」のようなテーマごとの情報を収集することが簡単にできる。教科書などの印刷媒体によるドイツ事情は，出版された途端に情報としては古びたものになってしまうことが多い。ホームページは日々更新されるので新しい知識が即座に得られる。確かに，その中には信頼性が疑われるような内容も紛れているかもしれないが，その内容を批判的に吟味する判断力も要求される。勿論，初級のドイツ語学習者にとって最初からドイツ語のホームページを理解することは困難だろう。そこで教師には，適切なレベルのホームページを選別する，場合によっては日本語のホームページも参照させるといったナビゲーション(誘導)の工夫が要求される。

具体例を示そう。99年度の１年次の『初級ドイツ語Ｉ』(90分・週２回，教育学部39名)のクラスで，１セメスターのほぼ最後の７月の２回分の授業を利用して，「ヴァーチャル・ドイツ旅行」のテーマでホームページを活用した。以下は，学生たちに配布したプリントの概略である。

「ヴァーチャル・ドイツ旅行計画(Virtuelle Reise nach Deutschland)」

タスク (Aufgabe):

ドイツ語圏の観光地の町を探して，その町への旅行日程(飛行機，列車，宿泊)を計画する。

・その町にはどんな名所があるか？(日本語・ドイツ語で)

・吉田のホームページの掲示板(「初級ドイツ語掲示板」)に計画を書き込む。

→ http://www.ipc.hiroshima-u.ac.jp/~mituyos

◎交通情報　(日本の空港からフランクフルト空港，フランクフルトから目的地まで)

・http://www.lufthansa.co.jp　(ルフトハンザ航空：日本語)

(飛行機の情報：ドイツの飛行機の玄関は Frankfurt。ヨーロッパ情報もある)

・http://www.lufthansa.co.jp/street/street.html　(ドイツ街道めぐり)

・http://www.jp.germany-tourism.de/ (ドイツ政府観光局)

・Deutsche Bahn:　http://www.bahn.de (ドイツ鉄道：DB)

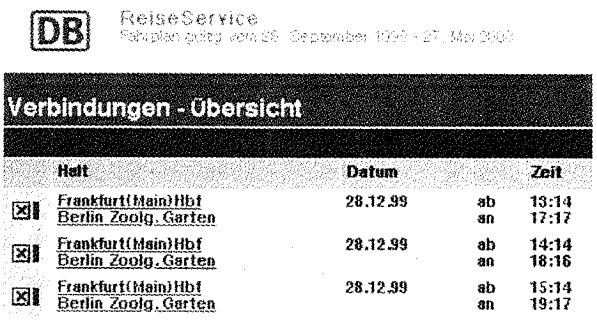
◎例 (Beispiel):

ベルリン(Berlin)　ミュンヘン(München)　ハンブルク(Hamburg)　シュトゥットガルト(Stuttgart)　ライプチッヒ(Leipzig)　ハイデルベルク(Heidelberg)　テュービンゲン(Tübingen)　フランクフルト(Frankfurt)　ケルン(Köln)　デュッセルドルフ(Düseldorf)　ボン(Bonn)　マイン

ルフトハンザのスケジュール

便名 (使用機材)	運航日	成田 発	名古屋 発	関空 発		フランクフルト 着
LH711 (B747-400)	毎日	10:55	・・・・・・		⇒	14:50
LH715 (B747-400)	月・水・土	14:35	・・・・・・		⇒	18:30
LH9361* (B747-400)	火・水・木・金・土・日	10:30	・・・・・・		⇒	14:40

ツ(Mainz)　コブレンツ(Koblenz)バーデン・バーデン(Baden-Baden)　コンスタンツ(Konstanz)　ローテンブルク(Rothenburg)　ヴュルツブルク(Würzbug)　フュッセン(Füssen)　ブレーメン(Bremen)　ゲッティンゲン(Göttingen)　カッセル(Kassel)　ハーメルン(Hameln)



◎検索エンジン：

検索語を入力して関連サイトを探す

ヤフー(日本): http://www.yahoo.co.jp

Yahoo (ドイツ): http://www.yahoo.de

Infoseek (日本): http://www.infoseek.co.jp

Infoseek (ドイツ): http://www.infoseek.de

ドイツの町の観光情報：例えば： http://www.frankfurt.de (フランクフルト)

※ München のようにウムラウトだと ae, oe, ue に変える→ http://www.muenchen.de

文法事項としては，方向の表現("gehen", "fahren", "ankommen" などの動詞・場所・方向の前置詞句)と時刻表現についての練習は終わっている。実際の授業のプロセスをまとめておく。

(i) 学生は2～3人ずつのグループに分ける。グループ作業は，議論させるという目的もあるが，ホームページに40人が一斉アクセスするとWWWサイトへの負荷やネットワークへの負荷が大きくなり，実行速度が極端に落ちるという実用性も考えた上である。

(ii) まず，日本ルフトハンザ航空のホームページを見て，出発地の空港と便名を決める(例えば関空発LH ○○便)。ルフトハンザのホームページには観光情報なども日本語で載っているから，それも見ておくよう指示する。航空チケットの予約もオンラインでできるようになっているが，ある学生が挙手して，「予約してもいいのですか？」と質問する。当然ながら「君がお金をためて本当に行くことになるまで待ってくれ」と答える。この過程では口頭によるダイアローグ練習も入れる。例えば，"Wann fliegt das Flugzeug nach Frankfurt?" － "Das Flugzeug fliegt um 9. 40 ab und kommt um 14.50 in Frankfurt an."－ といった応答練習である。

(iii) 目的地のドイツ語圏の都市についてホームページを参照しながら，決定させる。そこにはどんな名所・観光地があるかを調べ，そこで何をしたいか話しあう。古典音楽に興味がある学生なら，ウィーンとかライプチヒを選ぶ。新首都ベルリンを選ぶ学生もいるし，日本人に人気のある観光地のローテンブルクでもよい（日本語のページまである！)。どんな名所があるかをドイツ語で読むのは難しいが，写真や辞書を手がかりにイメージさせる。

(iv) その町までどのように行くか，ドイツ鉄道(DB)のホームページで調べさせる。出発地と目的地，旅行の日程をタイプすれば，該当する列車名と時刻，料金が自動的に表示される。

(v) メモした内容を整理し，文章として組み立て，筆者のホームページの掲示板に書かせる。

掲示板に書き込まれた例を2つ挙げる（文法的誤りは訂正していない。掲示板では日本語との

併記の関係で，ウムラウトは ae, oe, ue，エスツェットは ss と表記するよう指示した)：
"Ferien" (M. & T.) "Ich moechte am 1. August um 9.40 Uhr von Kankuu nach Frankfurt a.M. fliegen. Ich fahre mit dem Zug nach Heidelberg. Ich moechte den Burg gehen. Ich uebernachte in Heidelberg. Ich will am 3. August um 9.52 Uhr nach Mainz mit dem Zug fahren. Ich moechte die St.Stephan sehen. Dann fahre ich mit dem Zug nach Kassel. Ich moechte den Bergpark Wilhelmshoehe gehen. Ich will am 9. August um 13.25 Uhr von Frankfurt fliegen und am 10. August um 7.40 Uhr in Kankuu ankommen."
"Frankfurt" (T.Y &M.S &T.T) "Wir moechten in den Sommerferien nach Deutschland fahren. Wir wollen am 3. August um 9.40 Uhr von Kansai nach Frankfurt a.M. fliegen. Wir kommen um 12 Uhr in Frankfurt an. Wir wollen zum Roemerberg gehen. Denn wir moechten ein Frankfurter Wuestchen essen. Wir wollen in dem Hilton Frankfurt Hotel uebernachten. Wir wollen am 10. August um 13.25 Uhr von Frankfurt fliegen und am 11. August um 7.40 Uhr in Kansai ankommen."

インターネットを利用した旅行計画は，誰もが思いつく内容だが，対象言語が話されている地域を具体的にイメージでき，学習者の動機づけを高める。以下は，学生たちの感想の一部である：「今まで知らなかったドイツの情報が分かり，興味をもった」「ドイツが身近に感じられた」「実際のドイツ語の使い方に触れられた」「ホームページのドイツ語を読むことで，たくさんの情報が得られるので，『絶対に理解するぞ』と思った」「ネット上の写真や絵が想像力をかきたててくれた」「計画を立てているうちにドイツに行きたくなった」「自分で辞書をひいて文を作ったのがよかった」など肯定的な評価がほとんどであった（全体の感想で「とてもよかった」，「よかった」と答えた学生は39人中の33名で，「よくも悪くもなかった」が 6 名)。問題点としては，「観光地のことをドイツ語で表現するのができなかった」「旅行計画はまだ高度すぎたのでは」「コンピュータの操作で精いっぱい」といった感想が挙げられた。

教師としては，ホームページの対象を細かく制限せずに，さまざまなホームページを眺めさせて，学生の関心を引き出すことが主眼であったが，ドイツ語の運用能力，語彙力を考慮して対象を制限すべきであったかもしれない。例えば，教科書に出てきた都市のホームページに絞り込んで，幾つかのテーマを選ばせるといった工夫も考えられる。ホームページに頻出する単語・表現なども前もって練習しておくとよい。いずれにせよ，教師が意図した内容をシミュレーションするのが目的ではなく，学生が自身で計画をたて，ドイツ語で表現することが目的であり，教師としての役割はそのための手助けをしてやるということにつきる。

4．ドイツ語学習ページの利用 － ランデスクンデの素材

ドイツ語学習ホームページも多数開発されている。興味深いのはやはりランデスクンデに関するホームページである。ゲーテインスティトゥートのホームページには "Deutsch lernen" というページ(http://www.goethe.de/z/demindex.htm)がある。ここで注目されるのは "Kaleidoskop" (カレードスコープ) というプロジェクトである (http://www.goethe.de/z/50/alltag/deindex.htm)。カレードスコープは "Lernziel Deutsch" の著者 Wolfgang Hieber 氏が編集しており，取材や写真などを使ってドイツ人の日常生活を紹介したものである。その巻頭は次のように記されている：
"Möchten Sie wissen, wie Menschen in Deutschland leben, denken und fühlen? Wie sie ihren ganz normalen Alltag verbringen? Was sie tun, was ihnen Sorgen macht, und was sie

Kaleidoskop
Alltag
in
Deutschland

interessiert? Schauen Sie bei uns herein, und machen Sie mit beim Er-Lebens-Austausch!"

（ドイツの人々がどのように生活し，考え，感じているか知りたいと思いますか？彼らがいかに普通の日常生活を過ごしているか，何をして，何が心配で，何に関心があるか？私たちのところを見て，体験を一緒に交換しましょう）

"Start" を押すと，「新聞・テレビではドイツ人の生活についての情報が流れていて，すべて既知のものと思われるかもしれないが，本当にそうか？日常的なことがらはそこから除外されていることが多い。自分の目でみて，発見しよう」という内容のテクストとともに，7つのテーマが現れる： "Tat-Orte"（実行現場），"Menschen"（人々），"Rituale und Feste"（儀式と祭り），"Orientierung"（方位），"Meinungen"（意見），"Spaziergänge"（散歩），"Eindrücke"（印象）。「ドイツ」や「ドイツ人」について本もたくさん出ているが，それらは作者の目によって理想化していたり，欠点を肥大化していたりする。カレードスコープは断定を避けて，生活の局面を切り出して提示する。写真や短い文章を手がかりにさまざまのドイツ人の生活の実態，意見を追いかけて，自分たちの生活と比べてみるというのが主眼である。関係代名詞も接続法II式も出現し，長い文章も登場するので，レベルとしては，文法の基礎を終えた中級学習者向けだろう（大学2年生以上）。しかし，工夫をすれば初級のドイツ語でも使えそうである。

筆者は，99年12月にカレードスコープを使ったプロジェクト授業を行った。対象クラスは，前節で紹介した1年生の「初級ドイツ語II」のクラスで，授業4回分をとり，取り上げたテーマはちょうど12月だったので「ドイツのクリスマス(Weihnachten)」である。今回は，読解に焦点をしぼり（写真をヒントに要約する），読むホームページを基本的にカレードスコープに限定することとした。以下，その中で行った作業を紹介する：

1回目：教科書の宿題（受動文）の答合わせの後で，"Stille Nacht" のカセットを流し，歌詞のドイツ語を読み，発音練習を行う（これでクリスマスの雰囲気を盛り上げる）。この後，クラスを2名～3名ずつのグループに分ける。カレードスコープのメニュー・ページを開かせる。ここには7つのアイコンが並んでいて，その中に「クリスマス」についての話題があることを示唆し，どこにあるのか探すよう指示する。「メニュー」→ "Rituale und Feste" にジャンプ，その中の5つのアイコンから「ローソク」のアイコンをクリックすると，クリスマスツリーの写真が見える。ここがクリスマスのテーマである。10分もたたないうちにグループの一つがクリスマスのページを発見する（始めはローソク(Kerze)の絵とクリスマスの連想が結びつかないようだ）。単に資料をわたすだけだと，学生は受動的に資料と向き合うだけだが，探し出す作業によって，学習する側も発見しようとする積極姿勢が生じる。このページのテキストをみんなで読む：

"Wie wird dieses Fest vorbereitet? Wie erleben die Beteiligten diesen Tag? Einige Beispiele von vielen - authentisch - aber es kann auch ganz anders ablaufen (...)". このページの Info を開き，そのテクストも読む。"Weihnachten hat bei vielen Menschen immer mehr seinen religiösen Charakter verloren. Ursprünglich gefeiert als das Fest der Geburt Christi, verbindet man heutzutage mit dem Begriff "Weihnachten" oft nur noch Konsum und Urlaub. Je näher die Weihnachtstage rücken, umso größher die Hektik. (...)" といった現代ドイツのクリスマスの模

様が描かれる。これらのテクストはダウンロードしておき，コピーを配布し，“Weihnachten”, “Plätzchen”, “Verwandte”, “Kerzen”, “Krippe” などのキーワードを説明する。このページには8つのサブテーマがある： Plätzchen（クリスマスのクッキー），Adventszeit（アドヴェントの時期），Nikolaus (2)（聖ニコラウス），Weihnachtsmarkt（クリスマス市），Weihnachtsbaum (2)（クリスマス・ツリー），Krippe (3)（飼い葉桶），Geschenke (2)（プレゼント），Heiligabend (2)（クリスマスイヴ）（カッコ内の番号はページ数）。それらを閲覧し，次回からは，この中の一つをグループで読んで，要約する作業に入ることを指示する。

2回目：テーマの決定。テーマごとにグループで読み進める。ホームページをプリンタで印刷させる。筆者と T.A. の大学院生がグループを見て回り，難解な単語・文についてヒントを与える。

3回目：作業の継続。まとめが終わったグループには，作っておいたクリスマスリンク集から補足情報を検索するように指示。文法項目の補足（関係代名詞と接続法II式についての説明）。

4回目：グループ発表。この日は CALL 教室が使えず，LL 教室を使用する。学生たちが，教室の前でカラープリンタで印刷したカレードスコープの写真を接写カメラで提示し，マイクで各ページのポイントを日本語で説明していく。最初は緊張気味だったが，次第にほぐれて，活発なプレゼンテーションになる。中にはクリスマスの由来についてホームページで調べた内容を補足して発表したグループもあった。最後に，作業の感想をアンケートとして書いてもらう： 「興味があって聖ニコラウスがサンタクロースにとってかわる背景を調べたことがあるのですが，そんなこともあってヨーロッパでのクリスマスについて調べるのはとても楽しかったです」「こんなまとまった文章を読むのは初めてだったし，こんなに辞書を引き，先生に質問したのは初めてだった」「ドイツの Weihnachten はかっこいい。ファンになった」「発表はそれぞれが責任をもってできるので楽しい」「“教えられる”だけだと退屈なところもあるので，“自らやる”ような授業をしたほうが勉強にもなるし，楽しくできると思う」－などの肯定評価が多かった。

カレードスコープには “Forum” があり，内容を読んだ学習者が自分たちの国との比較・意見・質問を書き込めるようになっている。本当は，日本のクリスマスの紹介や質問を書かせるところまでもっていきたかったのだが，テクストの難易度と分量を考えると，そこまで要求するのは困難と判断した。例えば聖ニコラウスの最初のページの一部は以下のような内容である：

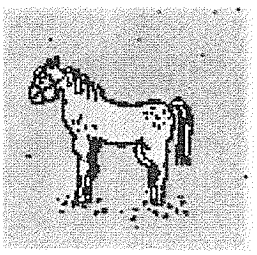
“Ich hatte mir erst überlegt, ob jemand aus dem Verwandten -oder Bekanntenkreis den Nikolaus machen könnte. Die Idee habe ich dann doch fallen gelassen, weil ich mir dachte: der kann dann nachher an unserer Runde nicht mehr teilnehmen. Denn wenn er später wieder auftaucht, wird er leicht wiedererkannt - am Gang, an der Stimme. Kinder sind da sehr gewieft. Also habe ich mich für den anderen Weg entschieden: Da gibt es in den Wochenblättchen diese Stadtteilanzeigen. Und da war eine Anzeige vom Akademischen Studentendienst, die machen den Nikolaus offenbar schon seit vielen Jahren. (...)” 学生バイトにニコラウス役を頼むくだりで，普通の教科書にはない内容で面白いが，量が多く，語彙も簡単ではない。今回はポイントを要約し，発表するという作業に徹することにした。カレードスコープ用の語彙集や，初学者用の平易な内容のページがあれば，もっと

使いやすくなると思われる。

5．ホームページ（掲示板）にテクストを書く　－ 創造的な表現の技法

ホームページは一般には情報を検索し，情報を得る道具と理解されている。確かに，HTML（Hyper Text Markup Language：ホームページを記述する言語）の文書はWWWサーバーに登録されたアドレスの持ち主が作成・変更するものであり，第三者が改変することはできない。しかし，CGI(＝Common Gateway Interface)のスクリプトなどを利用して，ホームページに掲示板を設置すれば，他のユーザーも文章を書き込める。この掲示板は，ホームページを見ることができれば誰にでも利用可能なので，手軽なコミュニケーション手段として機能する。これを使えば，あるテーマの議論とか，テクスト作成といった共同作業ができるようになる。

筆者は，98年冬に1年次の『初級ドイツ語II』のクラスで，絵を使ってドイツ語のメルヘンをグループで作るプロジェクトを実施した。筆者のホームページに幾つかの絵を貼りつけておき，メルヘン特有の語彙・表現を掲載した。学生たちはこれを参考に，自分達のアイデアでメルヘンを作る。個々人が書いた文章は「物語用掲示板」に書くことにより，グループ同士で共有できると同時に，他のグループも参照できる（「ここはこんな風に書けばよいのか！」)。ホームページの掲示板はクラス内のコミュニケーションを促すツールとしても役にたつ。物語は，筆者のホームページ上に公開すると断っているので，学生たちは本気で文章を練り上げる。レポートの類なら，学生と教師の間のやりとりで終わる。普通のグループ作業なら，アイデアはそのグループ内でしか共有されない。教室内の作業はいつも作為的なコミュニケーションの性質がつきまとっている。しかし，インターネットの媒介によって表現活動は教室の外の読み手を意識したものになる。つまり，大学という制度的枠組みに閉じこめられていたコミュニケーションが外の世界とのつながりをもつようになる。最終的には，掲示板の内容をHTML文書のひな形に流し込んで，各グループの物語を完成させ，CALL教室のサーバーに送る。筆者はそれを自分のホームページがあるWWWサイトにFTP（ファイル転送）で転送し，外に見える形で公開した。その一部分を挙げる（http://www.ipc.hiroshima-u.ac.jp/~mituyos/ geschichte 98/storyIndex.html）



Ein Pferd war zu alt, um zu arbeiten. Deshalb wollte es nach Bremen gehen und Stadtmusikant werden. Unterwegs traf es eine Maus. Die war auch schon alt und konnte nicht mehr arbeiten. Sie schloss sich dem Pferd an. Bald danach trafen sie einen Drach. Auch er wollte mit ihnen nach Bremen gehen, um Stadtmusikant zu werden. Schließlich kam noch ein Räuber. Die Bäuerin wollte ihn in der Suppe kochen, aber er wollte lieber in Bremen Stadtmusikant werden. Abends kamen sie zu einem Haus, da wollten sie schlafen. Aber in dem Haus wohnten Könige.　(...)”

この物語作成プロジェクトは予想以上に時間がかかった。学生たちがやめようとしないからである。ホームページは，単に世界の情報をどこからでも収集する検索ツールではない。それは，誰もが自分が創造した作品を表現し，公開できる創造的な表現の場なのである。

6．ホームページ利用型の外国語教育　－ 特徴と工夫

ホームページを利用した授業の例を紹介したが，最後にその特徴・工夫をまとめておく。

・グループによるプロジェクト型授業

ホームページを用いた授業はグループ単位で行うのが望ましい。パソコンを使うというと，個人の孤立した作業を連想するかもしれない。実際，英語のCALL教育では，学生達が教室にいる必要はなく，各人が好きな時に自分の作業（電子メール，ホームページによる調査など）を行い，成果を評価すればよいといった意見もある。しかし，知識は共有化されて始めて有効なものとなる。まして我々の目標が外国語によるコミュニケーション能力の向上である以上，パートナー不在の学習は自己矛盾である。グループ作業として位置づけると，ホームページを利用する前後に，パートナー練習や議論などの口頭練習も組み込むことができる。また，テーマを設定したプロジェクト型授業を行うことで，学生たちにも目的意識がはっきり見えてくる。

・どんなホームページでも教材にできる

学習用ではない実用目的のホームページも工夫次第で外国語学習に応用できる。コーヒーを製造しているネスレのホームページ(http://www.nestle.de)では“Frühstückscomputer”(朝食コンピュータ)というコーナーがある。コーヒー，紅茶やパン，バター，チーズなどの食品から好みのメニューを組み合わせると，そのメニューの健康度などを評価してくれる。教科書で食事に関するテーマを扱った後で，こうしたページを利用すれば，興味深く学習できる。

・ホームページの利用方法を工夫する

ホームページはハイパーテキストという性質により，どこにでも広がっていく可能性がある。そこが学習者の多様な関心を満たす長所だが，他方では，語彙的・文法的にも弱い初級レベルでは理解できないホームページもたくさんある。従って，学習レベルに応じて，最初は対象のホームページを制限することも必要である（いろいろ見たが，何も学ばなかったという結果を招かないため)。また，教師が予めホームページに出てくる語彙・表現などをピックアップして事前に練習しておく，あるいは対応するテーマの日本語のホームページを調べておく（場合によっては自分で作成する）などの準備もしておく必要がある。

・表現活動をコミュニケーションと結びつける

ホームページで多数の就職情報を見ても何ら就職活動にはならないのと同様に，外国語のホームページをたくさんネットサーフィンするだけでは，外国語の学習にはならない。大切なのは，世界中のネットワークにつながったコミュニケーションの場へと自らの表現の行為をつなげることであると筆者は考える。異文化理解の立場から日本の文化・社会を外国語で表現するのもよいし，異文化に対する疑問をぶつけるのもよいだろう。インターネットはもっとも経済的なデジタル出版の場と位置づけることによって，教室の活動は開かれたものに変わる。

・ホームページ利用の学習機能

本論では，情報検索とテクスト処理の機能にしぼって，ホームページの利用方法を展開した。語学トレーニングでは，文法ドリルから，音声・絵などを用いたマルチメディア・タイプの応用練習が可能である。トレーニング機能を実現するには，CGI技術や Java, JavaScript などの補助言語，(ShockWaveを用いた）Directorなどに習熟する必要があり，誰もが簡単に構築できるわけではない[4]。しかし，インターネット上では既成のトレーニング用ホームページが公開されているので，それらを用いれば教師が自分で開発する必要はない（どこに，どのようなドイツ語トレーニングができるページがあるか分類する作業は改めて別の機会で明らかにしたい)。

・教師のホームページを設置する

教師がホームページを開設し，クラスのページを載せれば，次回の授業のアナウンスや復習，

リンク集などを貼りつけることによって，学生は授業とのつながりを意識するようになる。

・ホームページでは何ができないか？

相手の言うことを聞きとって話す口頭トレーニングは，授業でのパートナー練習・会話練習で行うべきであり，インターネットに多くは期待できない。聞き取りについては，Real Audio などを利用した形のリスニングは可能で，“Deutsche Welle” がドイツ語ニュースを流しているが，レベルは中級またはそれ以上である。“Deutsche Welle” には “Elektronisches Klassenzimmer” という学習ページもある(http://www.dwelle.de/dpradio/bildung/deutschlernen/Welcome.html)。これは，通常の朗読の速度を落として聞き取りやすくしたもので，テクストもホームページに掲載されているので，聞き取った内容を確認できる。

他にも創意的な方法は色々考えられるだろうし，通常の授業の枠組みにおける改善策もいくらでもあるだろう。最後に，外国語教育を改善する多くの教員のアイデアを分散化させずに，まとめあげていくのもネットワーク上の大切な課題であることを付記しておく。

注

＊ 本論文は，広島大学外国語教育研究センターの平成９年度研究プロジェクト「インターネットを利用した高度外国語教育システムの研究」（代表：吉田光演，共同研究者：岩崎克己，澤田肇，村上久恵，山崎直樹）の研究成果の一部である。同時に同センターの平成11年度研究プロジェクト「ネットワーク利用型の外国語学習の現状と展望」（研究代表者：吉田光演，共同研究者：平手友彦，村上久恵）の研究プロジェクトの一環でもある。また，本論文の内容の一部は筆者が以下のタイトルで口頭発表したものに基づく： “Das Internet als kreatives Forum innerhalb und ausserhalb des Unterrichts”（1999年度夏期ドイツ語教員研修会（文部省/ドイツ文化センター，京都 1999. 7），“Web-Forum im Deutschunterricht” (“Multimedia” Seminar, Goethe-Insitut Frankfurt, Frankfurt 1999, 8,),「ドイツ語 CALL の新段階」（独文学会1999年度秋季研究発表会シンポジウム「コンピュータ支援ドイツ語学習の現状と展望」の報告，徳島大学 1999.10)。発表に対して貴重なコメントを下さった方々に感謝したい。また，T.A として CALL 授業の補助をしてくれた大学院生の田中雅敏君にも感謝したい。

1）リクルート社の調査によれば，文系理系を問わず大学生３・４年生の約７割が（主に就職活動が目的であるにせよ）インターネットを活用しているということである。

2）「ヤッフー」はディレクトリー型の検索サイトであり，独自の調査および登録希望に基づき，内容を精選した上で，ホームページを登録しているので，ロボット型の検索エンジンと比べれば登録数自体は少ない。しかし，内容は全体としてしっかりしたものである。

3）日本独文学会ドイツ語教育部会のシンポジウム『ドイツ語教育のランドスケープ』では，ドイツ語教育の目標について「異文化との間の交渉能力の養成」を提案している。

4）ホームページ上のドイツ語トレーニングについては，本学外国語教育研究センターの岩崎克己氏が幾つかのプログラムを開発している（http://home.hiroshima-u.ac.jp/katsuiwa)。

参考文献

Funk, H. (1999): *Lehrwerke und andere neue Medien - zur Integration rechnergestützter Verfahren in den Unterrichtsalltag.* Ms.

Issing, L. (1997): Innovation des Hochschulstudiums durch neue Medientechnologien. In: W. Günther & H. Manl (eds.), *Telelearning.* Deutsche Telekom. 65-76.

岩崎克己（1999）： 初修外国語授業支援のための自習用オンライン自動採点ドリル． 『広島外国語教育研究』 2（広島大学外国語教育研究センター）23-38.

Levy, M. (1997): *Computer-Assited Language Learning, Context and Conceptualization.* Oxford.
三宅なほみ（1997）「インターネットの子どもたち」 岩波書店
Rüschoff, B. & Wolff, D.(1999): *Fremdsprachenlernen in der Wissensgesellschaft.* Hueber.
吉田光演（1997）：インターネットを利用したドイツ語教育の試み．『視聴覚教育研究』11（広島大学総合科学部）36-47.
吉田光演（1998）：これからの CALL の展望．『広島外国語教育研究』1（広島大学外国語教育研究センター）77-86.

ABSTRACT

Einsatzmöglichkeiten des WWW im Deutschunterricht

Mitsunobu Yoshida
(http://www.ipc.hiroshima-u.ac.jp/~mituyos)

In diesem Aufsatz werden die Konzepte und Vorteile des WWW (=World Wide Web) im Deutschunterricht erörtert und dessen Einsatzmöglichkeiten im Unterricht vorgestellt. Durch das Internet kann man aktuelle Informationen über die deutschsprachigen Länder leicht abrufen. Das Internet funktioniert dabei nicht nur als Informationsmedium, sondern auch als ein Forum, in dem wir unsere Meinungen ausdrücken und mit vielen Leuten kommunizieren können. Diese Informations- und Kommunikationsfunktionen des WWW sollen auf den Deutschunterricht angewendet werden. Hier werden folgende Konzepte und Vorteile skizziert: i) Der Lehrer muss nur minimale Kenntnisse über die Technik haben. ii) WWW-orientiertes Deutschlernen ist auch im normalen Unterricht möglich. Außerhalb der Klasse können die Lernenden zu Hause oder im Computerraum WWW benutzen. iii) WWW ist als Materialien der Landeskunde geeignet. iv) Einsatz des WWW ermöglicht kreatives Deutschlernen als Gruppen- und Projektarbeiten. v) WWW bezieht sich auf die authentische Kommunikation, die über den institutionellen Rahmen der Universität hinausgeht. vi) Einsatz des WWW ermöglicht auch autonomes Lernen.

Anschließend werden drei Projektarbeiten vorgestellt, in denen die StudentInnen in Gruppen aktiv WWW benutzt haben:

1) Virtuelles Reisen nach Deutschland (Flug- und Zugverbindungen, Unterkunft und Sehenswürdigkeiten in einer Stadt); Mit Hilfe des WWW bilden die StudentInnen ihren eigenen Reiseplan und schreiben den Plan in einem WWW-Forum.
2) Informationen über deutsche Weihnachten sammeln. Die StudentInnen lesen verschiedene Seiten im "Kaleidoskop" (Goethe Institut) und berichten davon.
3) Erzählungen schreiben und auf dem WWW veröffentlichen. Mit Hilfe verschiedener Bilder und des WWW-Forums schreiben die StudentInnen ihr eigenes Märchen und veröffentlichen ihre Texte auf meiner *Homepage*.